豪雪地帯が生んだ繊維業・農業のこれから--新潟県十日町市の事例から

新潟県十日町市は新潟県南部に位置し、東京から新幹線で約 2 時間。人口約 5 万人の地方都市である。市の中央部には日本一の大河・信濃川が流れ、十日町盆地とともに雄大な河岸段丘が形成されている。

また日本有数の豪雪地帯として知られ、多い年には 3m 前後の積雪となり、特別豪雪地帯に指定されている。

同市では、河岸段丘上のあちこちで旧石器・縄文時代の土器類が出土している。特に世界的に名を馳せているのは、笹山遺跡から発掘された火焔型土器・王冠型土器を含む深鉢形土器群であり、縄文時代中期に作られたものである。国宝「火焔型土器」はいわば十日町市のシンボル的存在である。

また、ブランド米として有名な「魚沼産コシヒカリ」の一大産地として広く稲作が行われている。そのほかにもアスパラ、丸茄子（梵天丸)、かぼちゃ（くりゆたか)、中玉トマト、人参、枝豆などが代表的な野菜として収穫される。

そして京都の西陣と並ぶ織物の産地でもある。豪雪に見舞われる時期に、糸を紡ぎ、染め、機を織るのがこの地の仕事として定着し発展していった。その産業は脈々と受け継がれていき、国の伝統的工芸品に指定された「十日町絣」と「十日町明石ちぢみ」という織物も生み出した。

国宝「火焔型土器」新潟県十日町市笹山遺跡出土（紀元前 3000～前 2000）
十日町市博物館保管。

「日本三大峡谷」の 1 つ、清津峡渓谷のトンネルの「パノラマステーション」。

2000 年からは 3 年に 1 度「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」が開催され、世界最大級の野外アート展として知られている。そのため夏の開催期間には国内外から多くの来訪者がある（2021 年は新型コロナウイルス感染症(以下 COVID-19)蔓延の影響で縮小開催予定)。

最近では国内外各種メディアでの露出が増えている「清津峡渓谷トンネル」が注目を集めている。例えば 2018 年夏の「大地の芸術祭」に合わせて作られた「パノラマステーション」は、トンネル内部がミラー状になっており、床は一面に沢水が浸されている水盤になっていて、渓谷の景色の映り込みが美しい。いわゆる SNS 映えがするとして、若者を中心に人気スポットになっている。

このように特徴のある地域資源を多数抱える同市。その中でも今回は、この地域の 2 大産業である繊維業と農業について現地でお話を伺った。今回はこの模様をレポートする。

豪雪地帯の屋外活動制約の時期に生まれた繊維産業

最初に同市の繊維業について述べる。この地では古墳時代中期（5 世紀前後）の遺跡から、機織り用具が発見されている。雪のない季節には狩りや耕作を行うが、豪雪によって屋外生活が制約される時期が約 4 か月近く続く。そこで機織りや藁仕事を行う知恵が生まれたのである。

そして縄文時代からあったカラムシ（苧麻）などの植物繊維を利用した衣服は、やがて同市周辺で全国的にも良質な越後布として進化を遂げ産業として成長し

ていった。それには主に以下の４つの理由が考えられる。

①雪に閉ざされた冬には屋外生活ができないため、機織り仕事をすることに集中できた
②盆地特有の多湿な気候が、製織に必要な安定した湿度を保つのに適していた
③雪解け水の豊富な軟水が染色に最適であり、「雪晒し」（織り上げた布を雪原の上に広げてお日様に晒すこと）をして、漂白することができた
④織物が高価な割には軽量であり、信濃川の水運を利用した輸送に最適な産業であった

これらが地域の特産品として成長していく要因だったと言えよう。

着物の製作工程を全て見せることで、着物の魅力を世界に発信

実際に現地の繊維業を視察させていただいた。最初に訪れたのは、株式会社青柳（代表取締役社長　青柳 蔵人氏）である。同社の創立は 1938 年。80 年以上の歴史を持つ着物メーカーである。ただし青柳社長によると、京都や十日町は古い着物メーカーが多く、明治時代（1868-1912 年）創業くらいのメーカーが一番多いそうである。

それでも 80 余年の歩みの中では、いろいろな社会情勢の変化があり、転換点もあったことだろう。それについて尋ねてみた。

「十日町はもともと織から始まった土地柄です。着物には織と染めがありますが、当社も織で始めましたが、染めに代えました。これは技術的なものを含めて大転換でした。1972 年のことです。」と青柳社長は語る。

株式会社青柳　代表取締役社長　青柳 蔵人氏

本社に展示されている着物の一部

そして 1977 年から一貫生産体制を構築した。着物づくりは一般的には、染、絞り、手描き、箔、刺繍等、工程ごとに細かく分業化されている。例えば京都だと湯伸し屋さんや染屋さんなど、一人ずつが風呂敷に包んで持って回る。しかし、十日町は雪豪地帯であるため屋外活動ができない時期が長い。そのため分業が容易ではないので、一貫生産体制のほうが効率的で生産性も高いのである。一貫生産体制をするためにはそれに伴う技術者の育成は必須である。それぞれ業種

や技術によって職人を養成する期間は違うが、簡単なものは 1、2 年くらい、難しい技術を要するものは 5 年くらいかかるという。

そして技術者の高齢化も進んでいるが、外部からの若い人材の流入もある。デザインなどに興味を持って、関東圏からも入社希望があり、一番若い社員は 25 歳の女性だという。

数年前からは着物が出来上がるまでの工程を見ることができる同社の工房で、見学受付を始めた。青柳社長は以下のように語る。

「着物は高価なものだから、どうやって作っているのかわからないという方がほとんどだと思います。当社は一貫生産体制でどのように作られているのかを、消費者の皆様に工房で全てご覧になって頂けます。」

COVID-19 が蔓延する前は、海外からの見学希望者も多かったという。着物の愛好者層は３つある。富裕層のコアユーザー、SNS などを駆使して情報を拡散する若年層、インバウンドを牽引する海外の見学者層。その 3 つの層をうまく惹きつけるのが工房見学である。やがて COVID-19 が収束した時には、更にこの工房見学が着物の魅力発信基地になる。

工房で働く最年少の女性社員

安土桃山時代（1568 － 1600 年）から続く染色技法「桶絞り」

刷毛で生地を染める「引き染め」

そしてどんな社会状況下にあっても、この地域資源に根差す産業をステークホルダーとともに維持していき、今後は更に観光と結びつけて発展させていくことが、地域活性の鍵となるだろう。

流通短縮化の動向に伴い、直販型のビジネスに転換

次に着物の販売をはじめ、着物の生地を使った絵葉書や、和風の小物、バッグや風呂敷などを小売り・販売している店舗「和の風」を運営する千原株式会社（代表取締役社長　千原　祥一氏）に伺った。

創業は 1920 年代であり、法人化したのは 1969 年である。小売業としては 1996 年から店舗を開設した。それ以前は同市の買継商として、着物メーカーと地方の問屋を繋ぐ流通の役割をしていた。そこで最近の着物の流通の現状について、千原社長に尋ねてみた。

「着物の複雑な流通を調整するのが我々の役割だったのですが、年々その流通が簡素化されてきました。例えば着物メーカーさんの直販などもある中で、当社も問屋さんや小売店さんへの販売、いよいよ消費者への販売をしなくてはいけないという状況に変わりつつあります。今後は、なるべく消費者に近いところにシフトしていくことが必要です。」

写真向かって左・千原株式会社　代表取締役社長　千原　祥一氏、
右・奥様に囲まれて中央が筆者

そして COVID-19 は、着物業界への逆風になったことは否めない。冠婚葬祭の中止、自粛、延期。着物は冠婚葬祭に最も関わる衣装なので、COVID-19 以前は 2020 年の東京オリンピックの年に婚礼を計画した人はかなりいた。婚礼を挙げる当事者だけではなく、招待者も帯を作る、草履を買うという人が多かった。

「昨年 1 年間はほとんど冠婚葬祭の需要がなくなりました。そんな状況だったので、着物の好きな人が逆に見えてきました。」と千原社長。

涼やかな柄の浴衣類の一部

厳選された小物類に目を奪われる

十日町の着物布地を着物型に切り抜き台紙に貼った「絵羽はがき」。全国推奨観光土産審査会「国土交通大臣賞」受賞。

着物は高価なものが多いため、今まで若年層にはなかなか手が届かなかった。ところが所有からレンタル、リサイクル、いわゆる古着のような形で着物を着たいという若年層はたくさんいる。老舗のメーカーは主に富裕層をターゲットにしていくが、同社では浴衣や小紋、紬のような普段着、周辺小物へのウエイトをかける販売の仕方をしていきたいという。よりユーザーオリエンテッドを満たす販売戦略にシフトしていく、ということである。

確かに「和の風」には、高価な着物ももちろん展示販売しているが、厳選されたこだわりの小物類の取扱商品も充実している。そのため、あれこれ選ぶ顧客の滞留時間も長くなり、交流も生まれる。この場づくりも、大切な顧客サービスと言えよう。

また「大地の芸術祭」が開催された年には、海外からの訪問客もかなりあったという。着物を見て、海外の客は「ジェダイ」という。映画「スターウォーズ」（スティーヴン・スピルバーグ監督）に登場するジェダイのことだ。この映画では度々日本の着物が衣装に使われていた。海外からの訪問客に着物を着せてあげると、映画の登場人物さながらのスタイルやポーズを楽しむ。それで購買に結びついた例もあった。COVID-19 収束後のインバウンド需要のヒントであろう。

農業生産の雇用を維持するために仕事を生み出す

続いて十日町の 2 大産業のひとつ、農業について述べる。同市は魚沼産コシヒカリに代表されるように、雄大な自然を享受した農林水産物の農業産出額は約 63 億円を占めている。さらに豊富な農林水産物資源に裏付けされた食料品製造業等が、内発型産業として発展してきた。

食料品製造業の製造品出荷額は製造業出荷額全体の 27%を占め、従業者数割合は、同市における製造業の 18%を占めており、重要な基幹産業となっている（平成 26(2014)年工業統計調査)。

そこで農業現場のお話を聞くために、有限会社花水農産（代表取締役　宮内賢一氏）の農園へ伺った。創業は 1995 年である。

同社は豊富な雪解け水、肥沃な大地、山間地特有の気候風土の環境の中で、すべての作物に自社生産有機質肥料を使用し、循環型農業を行っている。GAP（「Good Agricultural Practice：農業生産工程管理」。食品の安全性や環境保全、労働安全などの持続可能性を確保するための枠組み）認証取得農園であり、SDGs（持続可能な開発目標）について先進的な取り組みをしている農園のひとつと言える。

同社は魚沼産コシヒカリ、大豆、野菜等の他に、米粉クッキー、笹団子、味噌、豆腐、豆乳等も作っている。人気商品は、佐渡の海洋深層水を使用した「みやうちのしおとうふ」だ。口に含んだ瞬間に大豆本来の甘味と香り、そして塩気が広がる。醤油をかけなくても食べられる濃厚な旨味がある。

有限会社花水農産 代表取締役　宮内 賢一氏

なぜ豆腐製造を始めたのかを宮内社長に尋ねてみた。

「稲作というのは夏だけのものです。冬には仕事がなくなるので、年間通しての雇用を考えないと従業員は守れない。30 年くらい前に、転作で大豆もたくさん作り始めました。そこで冬は豆腐を作り、夏は本来の農業をやろうということになったんです。」

豪雪地帯でありながら、農業を年間通して継続的に行うためには、新商品開発が必要だった。まずは雇用ありきで業務拡大は後からついてきたのである。

当初は冬に豆腐作りをしようと考えていたのだが、3～4 月頃から、豆腐が売

れ始める。工場長が 4 月になったらもう豆腐作りを止めて、本来の農業に戻ろうとしていた。ところがその頃から豆腐が売れ始める。そこで豆腐工場を専用に建設して、農業と兼業していた人たち全員を豆腐工場で雇用した。その分、また新しく農業従事者の雇用を生み出したのである。

雇用維持のために生まれた豆腐工場　　「

みやうちの「しおとうふ」は佐渡の海洋深層水を使用

未来を見据えて新たな取り組みにチャレンジする

　そして新たな農産物も手掛け始めた。「フレグランスピーチ」という桃の香りと味がする薄桃色の苺である。オリジナリティのある商品だ。

宮内社長に農園を案内してもらう

桃の香りと味がする「フレグランスピーチ」

同社では既に 2003 年から「雪国いちご　越後姫　愛ちゃん」というブランドのいちごを作っている。冬のハウスの中でじっくり育てるため、甘みが強く果実が大ぶりなのが特徴である。

本来、苺づくりは温暖な気候が適していると一般的には言われている。産地として有名なのは栃木県や福岡県、静岡県などの太平洋側である。日本海側で苺を作ろうという発想が、宮内社長の周囲ではそもそもなく、「雪国では苺はできない」と反対された。様々な農業関係者を説得して生産・販売に漕ぎつけた。「前例がない」ことは、得てして怖がってやらないのが定石だ。宮内社長はそこを突破してきた。

更に新たな試みとしては、農園の管理を AI で始めた。同社の農地は広大で約 60 ヘクタールある。その進捗管理を人に依存することはかなり大変だ。今後は AI で出来るよう、様々な実験を行っていく。

同市の繊維業、農業と 2 大産業について事例を紹介したが、そこで生きる人たちは豪雪地帯という厳しい自然環境を受け入れ、それに抗うのではなく共存

していき、産業を維持・発展させていく叡知を持っていた。地方小都市の生き残りが厳しいと言われて久しい昨今、同市の事例から様々なヒントを感じ取って頂ければ幸いだ。

文　奥山　睦

参考資料：
十日町市ホームページ
https://www.city.tokamachi.lg.jp/
きものの青柳－十日町市
https://kimono-aoyagi.jp/
十日町織物協同組合
http://www.tokamachi-orikumi.or.jp/
和の風　十日町市観光協会
https://www.tokamachishikankou.jp/spot/wanokaze/
和の風 小売・販売 ： 新潟県 十日町市 - Facebook
https://www.facebook.com/wanokaze/
花水農産
https://www.hanamizunousan.co.jp/farm.html
【GAP 認証取得農場】有限会社 花水農産 - 新潟県ホームページ
https://www.pref.niigata.lg.jp/site/nogyo-navi/gfc-hanamizu.html
平成 26 年工業統計調査
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00550010&tstat=000001022686&cycle=7&year=20140&month=0&tclass1=000001022790&tclass2=000001081715